



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3138 号 2016.7.20 発行

「クスのちから」販売好調 消臭や防虫などに効果 うきはの障害者施設が商品化【福岡県】

西日本新聞 2016年07月20日  
クスのチップを袋詰めするワークサポート白鳥の家の通所者にじの耳納の里などで販売されている「クスのちから」。1セット4袋で、うち1袋は巾着入り



J Aにじが運営する農産物直売所「にじの耳納の里」（うきは市吉井町福益）。野菜や果物が並ぶ中で、クスノキのチップを袋詰めにした「クスのちから」が売れ行き好調という。消臭や防虫などに効果があるとされ、市内の障害者施設が商品化した。発売までの経緯をたどりながら、この小さな商品に込めた人々の思いを追った。

発端は「鳥」だった。同市浮羽町山北の芝尾山中腹に、山春尋常小学校（山春小の前身）の運動場跡がある。いつ頃まで使われたか記録はないが、うっそうとした森のようになって久しい。中でも枝を張ったクスにはカラスなどが盛んに巣をつくり、周辺の果樹園への食害が深刻化。農家の苦情を受けた市は昨年夏、5本を伐採した。

いずれも樹齢100年を超す大木。切り倒した後の処置に困った市は、うきはブランド推進隊（地域おこし協力隊）の女性隊員、小崎尚美さん（31）に相談した。神奈川県出身の小崎さんは東京農工大で「森林科学」を専攻。2014年から市嘱託の「地域資源活用プランナー」として活動中だ。

「クスは古来、樟脳（しょうのう）の原料。伐採した木を活用してもらえればと、県内の樟脳製造業者を探し出した」という。ところが、業者が必要とするのは幹の部分だけで、すべて引き取ってほしいとする市側の希望と合わず、交渉は頓挫。そこで思い出したのが、2年前に知り合った大分県日田市で木材加工業を営む原田重臣さん（67）だった。

原田さんは8年ほど前からクスノキをチップにし、日田市内の障害者施設に袋詰めを委託する活動を続けており、引き取りを承諾した。その上で「うきは市の木なのだから、地元の障害者施設の支援に役立てたらどうか」と市に提案。原田さんの工場でチップ化し、市社会福祉協議会（石井忠孝会長）が運営する障害者就労支援事業所「ワークサポート白鳥の家」（同市浮羽町朝田）で通所者が選別、詰め込み、シール貼りをして商品化することが決まった。

市社協職員で同事業所管理者の天野宏一さん（46）は「従来のパンや雑貨製造に新た

な仕事加わることで、通所者の受け取る工賃アップにつながる」と歓迎。「クスのちから」と名付け、今年4月に事業所内の「白鳥の家ショップ」で発売した。次いで「にじの耳納の里」にも販売を依頼し、快諾を得た。店長の佐藤賢二さん（52）は「障害者施設を応援しよう」と引き受けたところ、予想を上回る売れ行き」と話す。

「クスのちから」は30グラム入り的小袋四つが1セットで500円。同事業所は5月、熊本地震被災地に100セットを贈り、大いに喜ばれたという。クスノキがもたらした心意気の輪が、さらに広がることを期待したい。問い合わせはワークサポート白鳥の家＝0943（77）4866。

## 小2に飛び降り強要、小4両親に1千万円賠償命令 千葉雄高

朝日新聞 2016年7月19日

東京都内の小学校に通っていた当時2年生の女子児童が2013年、同じ小学校の4年生の女子児童に命じられてマンション屋上から飛び降り、重傷を負ったとして、2年生の女兒と両親が4年生の女兒の両親に3千万円の損害賠償を求めた訴訟の判決が19日、東京地裁であった。小野瀬厚裁判長は4年生の女兒の両親に監督義務があったと認め、約1025万円の支払いを命じた。

判決によると、13年1月、当時10歳だった4年生の女兒は、8歳だった2年生の女兒が学校の前で縄跳びを振り回しているのを注意。さらに説教しようと9階建ての自宅マンションの屋上（高さ約26メートル）に連れて行き、「飛び降りろ。ここから落ちて死んでしまえ」と言って飛び降りさせた。2年生の女兒は木の枝に当たるなどして一命は取り留めたが、肋骨（ろっこつ）や足の骨などを折る約11週間の重傷を負った。

4年生の女兒は重度の難聴で両親は専門のクリニックに通って育て方の指導を受けていた。また、事件後に社会性の乏しさなどがみられる広汎（こうはん）性発達障害と診断された。

判決は、年齢や障害などを考慮して、4年生の女兒に責任能力はなかったと判断。その上で、両親の監督義務について「専門家に相談するなど子育てに相当の努力を払った」と認める一方、「他者が思い通りに動かないと怒りを持つ女兒の傾向に気づいておらず、対応は不十分だった」として賠償責任を負うと判断した。（千葉雄高）

## 福祉のまちづくりを考える 神戸でセミナー

神戸新聞 2016年7月19日

高齢者や障害者を地域で支える取り組みについて紹介する市川理事長＝神戸市中央区下山手通4、兵庫県公館



誰もが暮らしやすい生き方を目指す「ユニバーサル社会」のまちづくりについて考えるセミナーが19日、神戸市中央区の兵庫県公館であった。社会福祉法人「きらくえん」（同区）の市川禮子理事長が講演し、高齢者や障害者を社会全体で見守る体制づくりについて語った。

兵庫県などが主催し、福祉関係者ら約200人が参加した。

県内で福祉施設を運営する市川理事長は、認知症の高齢者らを地域全体でケアする取り組みを紹介。阪神・淡路大震災後は、高齢者や障害者をケアする仮設住宅の運営にあたり「ボランティアや介護職員による見守りの存在が安心感を生み、症状が和らぎ、自立生活に近づけることができる」と説明した。

同法人は現在も、復興公営住宅に入居する高齢者の生活相談支援を続けており「孤独死を生まない社会づくりのために、手厚い支援が求められる」と指摘した。

セミナーでは、県内でユニバーサル社会の取り組みについて尽力する個人や団体の表彰

式などもあった。(久保田麻依子)

## マツコ「68歳に見えない」 パラ日本代表最高齢に驚く 構成・榎原一生

朝日新聞 2016年7月20日



卓球台を挟んで話す別所キミエさん(左)とマツコ・デラックスさん＝金川雄策撮影  
リオデジャネイロ・パラリンピック日



本代表で最高齢の68歳。関西の「卓球マダム」と、タレントで日本財団パラリンピックサポートセンター顧問のマツコ・デラックスさんが語り合った。苦勞を乗り越え、その先にあったものとは。(構成・榎原一生)



マツコ(以下、マ) えっ、見えない。68歳には、別所キミエ(以下、別) 40代に見えますかね?

マ それはないわ(笑)。だけど、ほんとにお綺麗(きれい)。

別 好きなことをしているからとちやいますかね。あと、車いすだから、というのもあります。

マ どういうこと?

別 今より障害者への理解が進んでいなかった20年前は、特別な人間とか、汚いもののように思われていました。だから身なりだけでも、と心掛けるようにしているんです。

マ お化粧もして、髪や爪も綺麗だわ。年を取るとみんな地味になっちゃうけど、あれは逆よね。派手な方が絶対がいい。多くの人のお手本になると思うわ。



## 「ゆりかご」15年度は13人 熊本、国外から初めて受け入れ

北海道新聞 2016年7月19日

熊本市は19日、親が育てられない子どもを匿名で受け入れる慈恵病院(同市)の「このとりのゆりかご」(赤ちゃんポスト)に、2015年度は13人が預けられたと発表した。07年5月の開設以来、初めて国外から預け入れがあった。累計は125人。

15年度に預けられたのは、男児7人、女児6人。このうち、生後7日未満の早期新生児は11人だった。地域別では、東北地方と関東地方がそれぞれ2人、中国地方が1人、熊本県外の九州地方が4人。国外は1人だったが、市は国籍などの詳細を明らかにしてい



ない。3人は地域不明。

へその緒の状態などから、11人が病院外で生まれたとみられる。有識者でつくる市の「ゆりかご」検証専門部会は「自宅や車中での出産が増えているのではないかと懸念する。預け入れられた子に、病院での手当てが必要なケースも目立つ」と懸念する。

ゆりかごに置かれた手紙などに記された預け入れの理由は、未婚や父親との関係悪化、生活の困窮など。身体的な虐待が疑われる子はいなかったという。

## 自主性育む「遊び場」必要 滋賀・高島で静岡のNPO代表講演



京都新聞 2016年7月19日  
元気よく川遊びをする子どもたち（NPO法人ゆめ・まち・ネット提供）

自然の中での自由に遊ぶことで、自主性や社会性を育てる子育ての実現を目指す滋賀県高島市の母親グループ「つながる子育ての会」がこのほど、同市新旭町の観光物産プラザで講演会を開いた。静岡県富士市のNPO法人ゆめ・まち・ねっとと代表の渡部達也さん（50）夫妻が、約70人の親子連れを前に、遊びの大切さを語った。

### ■優劣がつかない体験を

渡部さんは静岡県庁を38歳で退職後、2004年にNPOを設立。公園や川で幼児から高校生まで、障害の有無などに関係なく無料で参加できる「冒険遊び場たごっこパーク」を開いている。

渡部さんは、「今の都市部の公園は、大声を出してはいけないーなど制約が多く、自由な遊びができない。かつて当たり前だった『危ない、汚い、ばかばかしい』遊びができる環境を子どもたちに返したい」と活動の原点を説明。特定のイベントやプログラムを設けず、いつ来ていつ帰っても、遊ぶ遊ばないも自由で、木登りやたき火など一見危ない遊びも大人は基本的に「見守る」だけという遊び場のルールを解説。不登校や発達障害の子も交え、生き生きと遊ぶ様子を映像などで紹介した。

また全国の学校で多発するいじめについて、「常に競争を求められ、中学で優秀でも高校では成績が下がる子が出てくる。優越感が劣等感に変わり、劣った他者を作り出し、優越感を取り戻そうとする」と分析。「遊びは優劣がつかない。木登りが得意な子は不得意な子に木登りを教え、仲間と喜びを分かち合おうとする。そういう体験がいじめをなくすことにつながる」と話した。

## <わたしの転機>度胸つき 発言きちっと 自閉症の娘が縁 年1回の芝居に出演



東京新聞 2016年7月20日  
素人劇団「福祉座」の公演で、「おまさ」役を演じる福井昌子さん（右）＝愛知県北名古屋市中

愛知県北名古屋市の素人劇団「福祉座」で、女優として活躍する福井昌子さん（69）は、自閉症の娘（43）を支える母親だ。出演するうちに、控えめな性格が積極的になった。「いろいろ経験できるのも娘のおかげ」との思いを胸に、今年も晴れの舞台に立った。

かつて盛んだった村芝居を復活させようと、旧西春町（現北名古屋市中）の福祉関係者が結成した福祉座。一九八七年の初舞台が好評で、今も年一回、江戸時代の人情物を専門に市内で公演を

続けています。

「福井さんも役者になってみない？」

福祉担当の町職員から声をかけられたのは、二回目の公演が計画されていた九二年でした。演劇なんてやったことないし、さんざん迷いましたが、「せりふが少ない役ならできるかも」と、思い切って飛び込むことにしました。

当時、娘は十九歳。夫が経営する会社を支えながら、心身障害者団体の役員を務めていましたが、そこに役者というもう一つの役割が与えられたのです。

初舞台はただの通行人役で、せりふは「どこへ行かれるのですか？」などわずかでした。それでも、出番の前には心臓がドキドキしてとても緊張しました。幕が下りたら、無事に演じ終えた安堵（あんど）感とともに、稽古がなくなる寂しさを感じました。その気持ちが忘れられず、今も続けています。これまで茶屋のおかみさん役が多く、自分なりに演じられるようになりました。

娘はパニックを起こすこともあります。私に用事があるときは娘を預かってくれる人もいます。夫は十二年前に仕事上の事故で亡くなりましたが、娘と二人で自宅で暮らせるのは、地域の人たちのおかげです。

毎年春から週一回程度ある稽古には、娘と出かけます。出番のときは他の出演者やスタッフが見守ってくれるんです。教員や郵便局職員、警察官など、さまざまな立場の団員との雑談が楽しみです。家にいるだけでは、人付き合いの範囲は限られますからね。

全国各地の村芝居との交流で、愛媛県や大分県などで出張公演をしたこともあります。もちろん娘と一緒に参加しました。

今、娘の将来のため、市内にグループホームを建設する運動に取り組んでいます。以前は、人の前に出るようなタイプではありませんでしたが、勉強会や行政との懇談の場では、芝居で培った度胸で、言うべきことはきちっと発言できるようになりました。古い友人からは「娘に感謝しなさい」とよく言われます。聞き手・稲田雅文

### 【リオパラリンピック】知的障害の陸上代表、山本萌恵子 本番に向け順調な調整をアピール

産経新聞 2016年7月20日

日本ID（知的障害者）選手権の女子1500メートルで力走する山本萌恵子＝18日、ヤンマースタジアム長居



陸上のリオデジャネイロ・パラリンピック日本代表、18歳の山本萌恵子（日本知的障がい者陸連）が18日に行われた日本ID（知的障害者）選手権女子1500メートルを4分54秒57で制し、入賞を目指す本番へ順調な調整をアピールした。

小学2年から学校で言葉を発せなくなった。同6年の頃には表情が消え、大声を出すなどの問題行動も増えた。

療育を検討する中、走ることに巡り合った。中学1年から毎日、午前5時半起床で3キロ走った。健常者との練習などで実力をつけていった。

最新の世界ランキングは日本勢最高の6位。日本ID選手権では気温30度を超える中、中盤で抜け出し、終盤のスパートで後続を引き離す力強さを見せた。

今も会話は苦手だが、親から自立しつつあるという。山本はリオ大会へ「日本記録を目指して頑張りたい」とはにかみながら言った。

### 絵画や書のリハビリ成果展 障害越え76人が180点 松戸

東京新聞 2016年7月20日

脳卒中などで体のまひや失語症などの重い障害を負った人たちが絵画や書の創作を通じ

て、前向きに生きるようになった過程と作品を紹介する作品展「生命（いのち）の灯ふたたび」が19日、松戸駅西口近くの松戸市文化ホールで始まった。機能回復や生きがい作りを目的に創作した76人の180点を展示している。24日まで。入場無料。（飯田克志）



脳卒中などで負った障害を乗り越えて創作された作品の数々＝松戸市で

当事者や家族でつくる「若葉の会」（松戸市）などの主催。同会は毎週金曜日に市総合福祉会館で、主宰者で言語聴覚士の横張琴子さん（83）の指導を受け、創作活動や交流を続けている。

失語症や右半身のまひは言語機能をつかさどる左脳が傷ついたため。横張さんは傷ついていない右脳が芸術分野を担っていることに着目し、三十八年前に左手を使った創作による機能回復訓練を国府

台病院（市川市）などで取り入れた。

作品展は一九八六年から、「脳の回復の可能性、リハビリなど適切で長期的な支援の必要性を知ってもらいたい」（横張さん）と隔年で開催。風景や花などの絵や書の作品と合わせ、発病から、回復した現在の様子までを創作の様子などの写真とともに一人一人紹介している。

五年前に打撲で頭を負傷した矢中興一さん（68）は仏像などの素描を出品。「横張さんや仲間に教えてもらい、納得できる作品を描けた」と話した。

問い合わせは、同病院言語リハビリ室＝電047（372）3501（内線3542）＝へ。

## 都内の待機児童8400人余 2年ぶりに増加

NHKニュース 2016年7月19日



東京都内で保育所などの空きを待つ、いわゆる待機児童の数は、2年ぶりに増加に転じ、ことし4月の時点で8400人余りに上ることが分かりました。

東京都のまとめによりますと、ことし4月1日時点での都内の待機児童の数は、去年の同じ時期と比べて652人増えて8466人となり、おとし以来、2年ぶりに増加に転じました。

また、都内で利用できる保育サービスはこの1年間で1万4192人分増えましたが、利用を希望する保護者の増加に保育所などの整備が追いつかず待機児童の数が増える状況となっています。

市区町村別に見ると、待機児童の数が最も多いのは、世田谷区で1198人、次いで江戸川区で397人、板橋区で376人などとなっています。

また、年齢別に待機児童の数をみると、1歳児が4447人、0歳児が2072人などとなっていて0歳児から2歳児までが、全体の95%を占めています。

都の福祉保健局は「都内で出生率や共働き世帯が増え、保育のニーズが高まっている。市区町村や事業者に対して財政支援を行い、保育所の整備にさらに取り組みたい」としています。

待機児童対策は、今月14日に告示された東京都知事選挙でも、主要な争点の1つとなっています。

## 主張 バリアフリー教育 障がいへの理解深める契機に 公明新聞 2016年7月20日

障がいの有無にかかわらず、誰もが互いに個性を尊重し合う「共生社会」の実現へ。障がいへの理解を深めるバリアフリー教育が、その大きな推進力となることを期待したい。政府は15日、共生社会への取り組みを検討する有識者会議を開き、2020年東京五輪・パラリンピックを契機に施策を進める計画「ユニバーサルデザイン2020」の中間取りまとめ案を公表した。

この中で注目したいのが、支え合いの意識を醸成する「心のバリアフリー」に関する提言であり、特に学校教育における取り組みだ。

具体策としては、20年以降の学習指導要領の改訂で、道徳を中心に「思いやりの心」を大切にすることや、障害者差別解消法などの社会の仕組み、さらには障がいのある人への接し方などを学ぶ指導・教科書を充実させる。音楽、図画工作、美術、体育などでも、そのような要素を盛り込んでいく。今回の計画により、これまで一部の学校で実施されていたバリアフリー教育を、すべての児童・生徒が体系的に学ぶことになる。大いに歓迎したい。

さらに、計画では障がい者との交流や活動を深める授業を全面的に展開するとした。例えば、障がいのある芸術家やスポーツ選手を講師に招いたり、特別支援学級の児童・生徒と一緒に授業を受けたりすることを想定している。

コミュニケーションを通じた体験や感動がなければ、本物の「心のバリアフリー」は生まれない。このため計画では、障がい者との共同学習を進めようと、文部科学省と厚生労働省を中心に「心のバリアフリー学習推進会議（仮称）」を設け、自治体単位で関係部局や社会福祉法人などのネットワークづくりを促進することが強調されている。

バリアフリー教育を行う教員の中には、授業のイメージがつかめず戸惑う人もいるだろう。教員研修の充実・強化はもちろん、モデル校の育成などによって参考事例を広める試みも必要ではないか。

地域の実情に応じたバリアフリー教育を各地で推進していくため、公明党は、現場の声に基づいた政策を国や地方で積極的に提言し、実現に全力を挙げていく。

## 社説：市民参加 「公開と対話」の京都市へ 京都新聞 2016年07月20日

京都市は市民参加推進計画を改定した。少子高齢化により人口減少が避けられない中、市民の「参加と協働」を一層進め、今後5年間で「豊かで活力のある地域社会」を目指すとしている。

人口も経済も「右肩上がり」の時代とは異なり、負担をいかに分かち合うかが地方自治体の大きな課題になっている。市民が市政に参加し、ともに力を合わせることで豊かさや幸福を実感できる社会を生み出すという方向性に異論はない。京都の伝統や文化の蓄積を生かしつつ、先駆的な取り組みの展開を期待したい。

市は2001年、市政運営の基本原則に市民参加を位置づける「市民参加推進計画」を作った。これに基づき、03年には市民参加推進条例を施行した。情報公開による市政の透明性向上▽市民の意見や提案への誠実な応答▽市民のまちづくり活動への支援などを盛り込んでいる。

いわば、「市民の目」から市政運営を自ら律する内容であり、当時としても画期的だったと言える。条例を根拠に、審議会の公開や市民公募委員の登用、市民意見の募集（パブリックコメント）の実施、NPOへの支援、市民提案事業の採用などが進んだ。一定の評価はできる。

ただ、課題も少なくない。意見募集や委員会公開は形骸化の傾向がある。不都合な情報を出し渋る体質も依然として見受けられる。

例えば、市民の賛否を呼んだ四条通の歩道拡幅事業や市営保育所の民間移管などは、計画段階で十分な市民参加ができていただろうか。市民の理解と協力を求める姿勢に欠ける



ところはなかったか。混乱や不安を招いた結果を真摯（しんし）に見つめ、検証せねばならない。

改定計画では、市民や地域団体、NPOなどの多様な主体がまちづくりの担い手となる「協働型社会」に向け、「必要な情報を全て積極的に迅速に、分かりやすく公開・提供する」とした。

その上で市民同士や市職員との「対話」を進め、市の課題や未来像を共有して、市民の主体的な行動へつなげるといふ。

計画には200超の具体的な事業を示すが、この「公開と対話」という原則、魂を抜きにしては、実施しても意味がない。まずは、その点を市職員に徹底すべきだ。市民参加に対し、濃淡がある職員の意識改革である。併せて、手間と時間を惜しまず誠実に市民と向き合う職員には、適切な評価をする仕組みも必要だろう。

### 社説：マタハラ対策 だれもが働きやすく

中日新聞 2016年7月20日

妊娠や出産を理由とする職場での嫌がらせ「マタニティーハラスメント」を防ぐため、厚生労働省は企業が実施すべき具体策をまとめた。誰もが働きやすい環境の整備を急ぐべきだ。

上司に妊娠を報告したら、二週間後に「勤務態度が悪い」という理由で解雇通知を受けた。育児休業明け、保育園の送り迎えができない勤務地への復帰を命じられた。市民団体「マタハラNet」には深刻な被害が多数寄せられている。

職場で妊娠や出産、育児休業を理由に退職や降格などを迫られるマタニティーハラスメント（マタハラ）に関し、全国の労働局に寄せられた相談件数は二〇一五年度、約四千三百件に上り、過去最多となった。

こうした不利益な扱いは、男女雇用機会均等法や育児・介護休業法で禁じられている。最高裁判決を受け、厚労省は昨年、育休の終了などから「原則一年以内に女性が不利益な取り扱いを受けた場合、直ちに違法と判断する」と明確化し、労働局に通知した。今年三月には均等法などが改正され、企業にマタハラ対策を義務付ける条文が加わった。

これを受け厚労省がまとめた指針案は、対処方針を就業規則などに明記し、加害者を懲戒処分にすることなどを求めている。このほか、周辺の社員に過度なしわ寄せがいかないよう、業務の点検や効率化を行うことも企業側の責務とした。相談窓口を設けるとともに、社員にハラスメントの内容や対処方針を周知することも盛り込んだ。来年一月の改正法施行に合わせて運用を始める。

指針案には、妊娠や出産したことへの嫌がらせのほか、休業や短時間労働などの制度利用の申し出に対し、上司が解雇や降格などを示唆するなど、マタハラ該当例も示した。

厚労省が昨年、女性労働者を対象に実施した初の実態調査によると、マタハラを経験したのは21%に上った。「休むなんて迷惑だ」「辞めたら？」など、出産や育児休業を問題視するような発言をされたケースが五割弱を占めた。加害者は直属の上司が三割で最多。また、企業規模が大きいほど経験率が高かったことも分かった。意識改革が必要だろう。

市民団体の調査によると、マタハラ被害者の多くが、長時間労働が当たり前という職場に属していた。ハラスメントを防止するとともに、長時間労働の是正など、全体の職場環境の改善も急ぎたい。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

